

田辺聖子

蜻蛉日記を
一緒に



かげろうにつ き 　 いっしょ
蜻蛉日記を 一緒に

た なべせい こ
田辺聖子

© Seiko Tanabe 1991

1991年9月15日第1刷発行

1993年9月1日第5刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容
内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。 (庫)

ISBN4-06-185009-1



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——加藤製本株式会社

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



講談社文庫

蜻蛉日記をご一緒に

田辺聖子

講談社

皆さまこんにちは。

今日から八回にわたり『蜻蛉日記』のお話をしたいと思います。

何か古典作品をとりあげて、それをご一緒に読みつつ——といっても、厳密な意味での講義ではなく、なんとなくその作品をめぐる皆さまと共に考え、現代に通じ、身近に生かせる問題として、古典を味わいたい……そんな気持で私はお話しすることにしました。

目次

蜻蛉日記はなぜ書かれたか

9

蜻蛉日記の王朝

43

結婚といさかい

87

兼家、病む

129

初瀬詣はせもうで

167

西山ごもり

199

心の鬼

243

愛をもとめつづけた女

281

おわりに

325

カット 〓 本くに子
レイアウト 〓 岸顯樹郎

蜻蛉日記を
ご一緒に

蜻蛉日記はなぜ書かれたか



『蜻蛉日記』は妻の手記

さて、どういうお話をしようかといういろいろ考えたんですけど、特に『蜻蛉日記』を取り上げましたのは——ちようどいま私が『週刊朝日』で「新・源氏物語」を書いていきますでしょう（注・昭和四十九年から五十二年まで連載）、それで『源氏物語』と『蜻蛉日記』の違いなどということをいろいろ考えたりしましてね。『源氏物語』は（これは瀬戸内寂聴先生がおっしゃった言葉ですけれども）いうならば週刊誌の連載小説で、波瀾万丈の大変おもしろい読物である、それに対して『蜻蛉日記』は純文学である、と。それからまた、竹西寛子さんという、すぐれた国文学者で評論家でもあられて、そしていい小説もお書きになる女流文学者がいらっしやるんですけれど、その竹西先生は、『蜻蛉日記』を読んでいると、物を書くことによってだんだん成長していく女の姿というのが如実に出てて大変おもしろい、という点に感心しておいでです。

以前、私は『婦人公論』の女流新人賞の審査員をしておりましたが、集まってくる作品を読んでもみますと、最近手記風なものが大変多いのです。皆さまもご承知の通り『婦人公論』には実

話や手記がたくさん載っておりませんが、あの雑誌でおもしろい読物というのはたいいてい、投稿の手記なんですね。どうかすると、専門家のお書きになった文章よりも手記の方がおもしろい場合があるの。

それで、『蜻蛉日記』というのは、私はやっぱり女の人の書いた「手記」ではないかと思うんです。たとえば、手記によくある、「この横暴な夫に耐えて風雪の二十年」とかね（笑）。『蜻蛉日記』の作者の夫は、ご存じのように藤原兼家ふじわらのかねいえという人ですけれども、私などからみますと、大層魅力のある男性なんです。要するに、そのころの男の考え方から一步も出ていない、横暴で、自分勝手な、男の本性そのままをむき出しにしたような人ですからね。「この横暴な夫に耐えて風雪の二十年」というのは、まさしく『蜻蛉日記』そのものをあらわしたものだと思います。つまり、この本は、一言でいうと、夫に愛されること薄かった妻の、恨みつらみの手記です。千年昔の手記です。

ところがその手記は、『蜻蛉日記』がだんだん終りになるにしたがって大層すぐれた文学作品になっていきますのね。これは大きな文学的課題の一つです。なぜ、手記が文学に昇華したか。手記と文学の違いというのは、どういふところにあるんだらうかと私は一生懸命考えて、いまだに結論が出ないんですけれど、そういう点についても皆さまと考えていきたいと思っております。

女の本性をむきだしに

それから、『蜻蛉日記』の作者というのは、自分の生まれた家で親から大事に養育され、社会へ出ることなく世間の荒波に当らず、そのまま結婚によって夫の手に託されて、中年以後は一人息子の成長を楽しみに生きたという、これも現代のある種の主婦の姿にちよどびったり重なって、とても千年前のお話とは思えないわけですね。

このヒロインの性格も、これはもう女の本性をむきだしにしています。夫に劣らず非常にわがままで、自分勝手に、自分中心に物を考えていて、何でも自分の思うようにならないと気がすまない。相手の気持を思いやってあげるといふ広い心は薬にたくもないし、距離をおいて物を考えるということができない。私なども考えてみますとそうなんですけれど、そういう点がまるで女性の代表選手みたいな気がするわけです。だから、千年の後に『蜻蛉日記』を読んでいて、あつ、ここに私がいる、っていう気が、女ならどなたもなさると思うのです。

そのような点で非常にポピュラーで、私たちがいま読んでも大変おもしろい、身近に感じられる作品です。

原文は『源氏物語』より難解な文章ですから、一々逐語訳でやっていたのではそれに気を取られて全体の意味がかえってつかめず、おもしろくありませんので、「私が読んだ『蜻蛉日記』」という形でおしゃべりして、次にはそれについて皆さまのお考えも聞かせていただいたりして、「われわれ女の生き方」、それから「女と男のあり方」、それはとりも直さず『蜻蛉日記』の作者

が世の中に問いかけた言葉ですけれども、そのようなことを考えていききたいと思って『蜻蛉日記』を選びました。

大分前ですけれど、『週刊読売』で「日本悪女伝」というシリーズが連載されました、私には『蜻蛉日記』の作者を割り当てられたのです。「悪女烈女」というテーマだったので、川上貞奴とか、日野富子とか、春日局とか、史上悪名勇名とどろいている人たちを女流作家が一人ずつ取り上げて書くわけですね。『蜻蛉日記』の作者というのが候補に上がって、私はその頃まだもう少し若かったものですから、この作者を悪女として取り上げて書きました。この蜻蛉っていう女は、若い頃の私にとって悪い女としか思えなかった。（『蜻蛉日記』の作者の名前はわかっておりませんから、仮に「蜻蛉」という名前にしておきましょう。）

たとえばこのヒロインは、すごくこう、たけだけしいんですね。皆さまもご承知のように、小倉百人一首に、「右大将道綱うだいしやうみちつなの母」という名前で蜻蛉の歌が出ております。

嘆きつつ独り寝る夜ぬのあくる間まは いかにかに久しきものとかは知る

夫の足がしばらく途絶え、やっと訪ねてきたとき、その前にいろいろ夫の艶聞を耳にしておりましたものですから、戸をたたいても開けさせない。女房たちがへあつ、殿がいらっしやいましたよ、戸をお開けしましょうか」と言いますけれど、へ開けないでいいわ」と言うのです。それは、蜻蛉は本当は来てほしいのだけれども、夫のほかの愛人に嫉妬するあまり、ちよつと突っぱってやろうと、すねてふてくされていているわけです。夫の兼家は、しばらく戸をたたいていたん

ですけれども、しびれを切らしたのかして帰っていきました。

その明くる日に蜻蛉は先ほどの歌を書いて、……そのころの文の便りというのは、「源氏物語」にもありますけれども、何かその歌なり、手紙の文章なりにふさわしい、木の枝なり花なりをつけて贈るのがならわしです。蜻蛉はこの歌に、色の移ろった、しおれかかった菊の花を添えて、へこんなに悲しんで、長い独り寝の床に夜明かししているわたしの気持なんか、とっても男のあなたにはおわかりにならないわ」というような意味の強い調子のマジメな歌を遣ります。兼家の方は、もう少しやららんぼらん男ですから、それに対して、へいやまあ、夜通しでも戸を開けてくれるまで待とうと思ったが、急ぎの用事もあってね」とか言いつくろって、「げにやげに冬の夜ならぬ真木まきの戸も 遅くあくるはわびしかりけり」——なかなか開けてもらえないのも辛いものだ、というふうな、一見しおらしい、しかしちよつとはぐらかして舌を出しているような返事をするんですけれどね。

「なげきつつ」という歌の調子などは、これは後世、名歌の一つにされていますけれども、歌の文学的価値はともかく、われわれ女からみても、もうちよつと上手な駆け引きがあるんじゃないかと。二十世紀のわれわれはもっと老獪ろうかいになっておりますから、久しぶりで来た夫がどんどん戸をたたいているのに、すねて開けさせない、という突っぱり方をするよりは、普通もう少しうまいやり方をしたのではないかと思えますけれども。そんなところが、蜻蛉は教養の高い女の人ですけれども、女の本性むきだして大変あからさまに出てるわけですね。

それが若い私にはどうも悪女と思えて。私はそのころ結婚してたのかな、してなかったのか